２０１９．２．２１

　　　　　　　　　　　**花札の歴史**

1．**「花札」**は**江戸中期**に考案された**「花かるた」**とよばれる**カルタ**遊びである。**カルタ**の語源はポルトガル語の「Carta」、いわゆるカードの事で、日本では「歌留多」などの当て字も使われた。

2．**「花札」**には**２つの源流**がある。**１つ**は１６世紀半ばの安土桃山時代にポルトガルから九州に渡来したカード遊びの**「南蛮かるた」**であり、**もう１つ**は平安時代に宮中や貴族の子女の間で遊ばれた**「貝合わせ」**や**「歌貝」**で、**「花合せかるた」**や**「歌かるた」**（後の「百人一首」）に発展していった。

3．国産の**カルタ**の第一号は天正年間（1,573～1591）に筑後・三池で**「南蛮かるた」**を元につくられた**「天正かるた」**であり、48枚（4ｽｰﾄ×12ﾗﾝｸ）であった。**カルタ**は貴族や戦国武士たちの遊びとして盛んになったが、やがて賭け事にも使われ始め、熱中度が高まるようになった。土佐の長曽我部は1597年「博打歌留多」の禁止令を発布している。

４．江戸時代になると**カルタ**は大流行して犯罪の増加などの問題も生じ、幕府は1648年にカルタ禁止令を出すに至るが、これにより、**「天正カルタ」**は地下に潜り、密かに賭博に使われるようになった。

5。**「天正カルタ」**にかわり、多人数で遊べる**「うんすんかるた」**（5ｽｰﾄ×15ﾗﾝｸ）が考案された。カルタは裕福な町民に広まり、そして安価なカルタが出回るようになると一般庶民にも広まって大衆娯楽化し、賭博性も強まっていった。

安政の改革（1702）により賭博規制は強まったが、賭博カルタにかわる**「歌かるた」**や**「花合せかるた」**などが生まれた。

7．その後、吉宗の**享保の改革（1716～）**により賭博規制は緩和され、この時期に**「花かるた（花札）」**が考案された。**「天正かるた」**が4ｽｰﾄ×12ﾗﾝｸであったものを、**「花かるた」**では4枚×12か月とし**「花合せかるた」**、の**花鳥の図案**を取り入れた。

8．**花札の図柄**は当初の**手書きカルタ**から江戸後期の**木版花札「武蔵野」**、さらに明治中期の**「八八花札」**と変遷し、現在の**「花札」**となった。

・**カルタ**を**札**と呼ぶのは、賭博に使われるという意味合いで、警察が使い始めた言葉

・**「天正かるた」**：刀剣・貨幣・聖杯・棍棒の4ｽｰﾄ、絵札は国王・騎士・女王で、それぞれのスートの1にはドラゴンが描かれている。数字カードは１～９までで12ランク

・**「うんすんかるた」**：グル（巴紋）というスートが加わり5スーとし、さらにそれぞれのスートにウン（福の神）スン（唐人）、1から独立させたドラゴンの絵が加わり15ランクとした。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（了）

**「花合わせ」**は安永以前（1700代）に上方で作られた。

　**花合わせ**とは同じ花木・草花の描かれた2枚の札を合せとるカルタ。　同種札4枚のものが残されている。（金沢藩の中級武士伝来　１００種草花で４００枚））　41

百人一首：[室町時代](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%A4%E7%94%BA%E6%99%82%E4%BB%A3)後期に連歌師の[宗祇](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%97%E7%A5%87)が著した『百人一首抄』（宗祇抄）によって研究・紹介されると、小倉百人一首は歌道の入門編として一般にも知られるようになった。[江戸時代](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%9F%E6%88%B8%E6%99%82%E4%BB%A3)に入り、[木版画](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%A8%E7%89%88%E7%94%BB)の技術が普及すると、絵入りの**歌がるた**の形態で広く庶民に広まり、人々が楽しめる遊戯としても普及した。

**ホトトギス**の異称のうち「杜宇」「蜀魂」「不如帰」は、中国の[故事](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%95%85%E4%BA%8B)や[伝説](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BC%9D%E8%AA%AC)にもとづく。　蜀という傾いた国（秦以前にあった[古蜀](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%A4%E8%9C%80)）があり、そこに[杜宇](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%9B%E5%B8%9D%E6%9D%9C%E5%AE%87)という男が現れ、農耕を指導して蜀を再興し帝王となり「望帝」と呼ばれた。後に、長江の氾濫を治めるのを得意とする男に帝位を譲り、望帝のほうは山中に隠棲した。望帝杜宇は死ぬと、その霊魂はホトトギスに[化身](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%96%E8%BA%AB)し、農耕を始める季節が来るとそれを民に告げるため、鋭く鳴くようになったと言う。また後に蜀が[秦](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%A6)によって滅ぼされてしまったことを知った杜宇の化身のホトトギスは嘆き悲しみ、「不如帰去」（帰り去くに如かず。＝ 何よりも帰るのがいちばん）と鳴きながら血を吐いた、血を吐くまで鳴いた、などと言い、ホトトギスの口の中が赤いのはそのためだ、と言われるようになった。

**小野 道風**は、平安前期・中期にかけての[貴族](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B2%B4%E6%97%8F)・[能書家](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9B%B8%E5%AE%B6)。　[参議](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%82%E8%AD%B0)・[小野篁](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E9%87%8E%E7%AF%81)の孫

道風が、自分の才能を悩んで、[書道](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9B%B8%E9%81%93)をあきらめかけていた時のことである。ある[雨](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9B%A8)の日のこと、道風が[散歩](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%95%A3%E6%AD%A9)に出かけると、[柳](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A4%E3%83%8A%E3%82%AE)に[蛙](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%9B%99)が飛びつこうと、繰りかえし飛びはねている姿を見た。道風は「柳は離れたところにある。蛙は柳に飛びつけるわけがない」と思っていた。すると、たまたま吹いた[風](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A2%A8)が柳をしならせ、蛙はうまく飛び移った。道風は「自分はこの蛙の努力をしていない」と目を覚まして、書道をやり直すきっかけを得たという